

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 野村 智清

野村智清氏の論文「バークリと経験しえぬもの—その方法を巡って—」は、18世紀初頭にアイルランドで活躍したジョージ・バークリの哲学について、その議論方法に着目して、従来哲学史の標準的な解釈において採用されていたバークリ像を一新することを狙ったものである。これまでバークリは、いわゆる「観念論」の権化と見なされてきた節があるが、野村氏の論文は、そういう見方では、対応する観念を持たない科学的概念や宗教的概念についてのバークリの議論の意義を見定められないと指摘し、しかも、バークリ哲学に本来的に宿るキリスト教への護教的動機にも整合しないと喝破していく。

本論文は、第1章の前置きと第9章の結語を除いて、7章からなる。第2章と第3章では、バークリのいわゆる「存在するとは知覚されることである」という原理に集約される非物質論とそれに派生する議論の論証が、「言葉」に関するものであり、それがゆえに、「言葉」の意味という問題こそがバークリ哲学理解の中核をなすという点が確認される。野村氏は、バークリが、そうした言葉の意味を論じる方法として、自分自身や他者に対して、それに対応する観念があるかの探索を要請していると解する。それを受けて、第4章と第5章では、対応する観念を持たない議論や言説は意味を持つか、という問題が扱われる。野村氏はこの問題に対して、同じくアイルランドの哲学者トランドの『神秘的なきキリスト教』で展開された、観念を持たない奇跡の言説は理解できず、よって信仰できない、という議論を検討し、バークリの『アルシフロン』で論じられる言語論は、トランドの議論を論敵として念頭に置いたものだとして解釈する。バークリは、観念を持たない言説でも、情緒や行動を喚起できるのであれば有意味である、とする「意味の情緒説」を展開し、トランドの議論を論駁しようとしたというのである。そして、第6章で、バークリが「常識」に関して両義的な姿勢を示していたことが指摘される。すなわち、バークリは、観念に関しては常識に融和的に、しかし観念ならぬ関係や宗教的言説に対しては常識と非融和的に対峙していたとされる。その上で、第7章と第8章では、常識が揺れ動く場の象徴として、『視覚新論』で扱われる「モリニュー問題」が俎上に挙げられ、バークリの非物質論の根底にある宗教的動機が暴き出される。野村氏は、開眼した生来眼の不自由な人は、見ただけで球と立方体を識別できるか、という同じくアイルランドの学者モリニューが提起した問題は、単なる認識論的な問題なのではなく、経験できず観念も持てない宗教的奇跡はどのように信仰されるか、という問いとパラレルな問題地平から理解されるべきだと結ぶ。

全体の章構成が最良ではない可能性もあるものの、従来、観念論・独我論の典型と目されてきたバークリ哲学を、言葉の有意味性を探る方法論への着目によって、しかも「モリニュー問題」の独自の解釈によって、新しい姿のものとして描き出した点は高く評価されるべきである。よって、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に十分値すると判断する。